

平成14年度 KVBCの歩み (ダイジェスト)

会員相互の交流を目的とし、様々な情報収集や意見交換を積極的に行ってきたKVBC例会。

今回は2002（平成14）年度を振り返り、KVBCが取り組んできた活動内容をダイジェストでご紹介します。

1.事業概要

KVBCの更なる飛躍を目指し、事業内容の再検討や改善に加え、ホームページによるKVBCのPRと会員企業の情報発信を行いました。

2.全体会

年4回の企画拡大セミナーと経営セミナー、総会・例会・研修会・納涼会・忘年会を開催し、計10回の全体会に取り組みました。

3.プロジェクト事業

- ものづくり研究会 定期総会や一泊研修会の開催など、計11回の研究会を開催。
- グローバル問題研究会 昨年8月、発足会を開催。

4.研修事業

昨年8月、毎夏恒例となった経営セミナーは、クラーク大学（アメリカ）助教授の青山裕子氏を講師にお招きし、納涼会と兼ねて開催。昨年12月には、花園大学教授の芳井敬郎氏を講師にお迎えし、京都の文化再発見をテーマにご講演をいただき、その後、忘年会を行いました。

5.第16回京都ベンチャーセミナー

京都市、日本経済新聞社との共催により、講師に中部大学教授 工学博士 梅崎太造氏を迎えての講演『産学連携の失敗と成功のカギ』を開催しました。

6.新規会員の開拓

KVBCのPRIに努め、新規会員4社、新規賛助会員1社の入会がありました。

7.その他の事業

会員の内外に会員企業やKVBCの活動を紹介するため、機関誌「SHAKE HANDS Letter」を毎月2,000部発行。今年度より表紙デザインを一新しました。

第18回2002年度総会

日時	2002年6月13日 14:00～19:00
場所	全日空ホテル
概要	第1部 2001年度事業報告・収支決算報告・監査報告、役員改選、2002年度事業計画案・収支予算案、規約の一部改定 第2部 講演会【平井誠信氏・関西テレビ放送デジタル推進局長】 第3部 懇親会

第1回例会

日時	2002年7月12日 18:00～20:30
場所	保養所きよみず
概要	京都市スーパーテクノシティ構想について 【白須正氏・京都市産業観光局スーパーテクノシティ推進室長】

KVBC経営セミナー＆納涼会

日時	2002年8月2日 17:00～20:00
場所	しょうざん
概要	日米ベンチャービジネスの比較と地域性 【青山裕子氏・クラーク大学教授】

第1回KVBCオープンセミナー

日時	2002年9月20日 18:00～20:00
場所	キャンパスプラザ京都
概要	ベンチャー的ものづくり 【バネリスト／大橋正明氏・マイクロニクス（株）、井手邦彦氏・洛陽技研（株）、山中泰宏氏・（株）旭テクノプロデュース、関義一氏・京都技研工業（株）コーディネーター／澤村栄治氏】

第2回KVBCオープンセミナー

日時	2002年10月18日 17:00～19:00
場所	キャンパスプラザ京都
概要	ベンチャー経営の内部点検 【バネリスト／富田尚男氏・富田尚男税理士事務所、長谷川佐喜男氏・総合経営（株）、山口弘志氏・監査法人トーマツ、トーマツベンチャーサポート（株）コーディネーター／築地達郎氏・（株）京都経済新聞社】

第3回KVBCオープンセミナー

日時	2002年11月15日 18:20～20:30
場所	キャンパスプラザ京都
概要	歴代京都ベンチャー大賞受賞企業に聞く、その後のビジネス展開 【椿森信一氏・（株）ハネックス・ロード、蛭川隆氏・（株）シルク工藝、向園好信氏・サツマ通信工業（株）、山田忠幸氏・山田技研（株）、石橋昇氏・（株）カーボテック、長澤恒也氏・（株）京都ソフトウェアリサーチ】

研修会＆忘年会

日時	2002年12月12日 15:30～20:30
場所	祇をん新門荘
概要	京都の文化再発見～その成立過程と構造～ 【芳井敬郎氏・花園大学文学部教授】

第4回KVBCオープンセミナー

日時	2003年1月24日 17:00～19:00
場所	キャンパスプラザ京都
概要	環境をビジネスする 【バネリスト／直江一治氏・（株）島津ビジネスシステムズ、有川晴彦氏・アーク・テクノリサーチ（株）、吉村賢氏・（株）京都インテリジェンスサーチ、川端克裕氏・大洋エレックス（株）コーディネーター／澤村栄治氏】

第16回京都ベンチャーセミナー

日時	2003年2月25日 15:00～19:00
場所	キャンパスプラザ京都
概要	産学連携の失敗と成功のカギ～福祉・セキュリティ・ロボット技術に関して～ 【梅崎太造氏・中部大学教授】

バリュークリエーションセミナー が開催されました

去る3月13日、ウイングス京都において、バリュークリエーションセミナーが行われました。開会に先立ち、京都市産業観光局長の島田與三右衛門氏は「厳しい経済状況だが、金融支援とともに、中小企業の経営革新や技術革新をできる限り支援していきたい」と挨拶。引き続き、「伝統の中のしなやかな革新」をテーマに吉忠（株）吉田忠嗣 代表取締役社長が講演を行いました。

伝統の中のしなやかな革新

吉田 忠嗣氏（吉忠（株）代表取締役社長）

時の流れに従ってピンチを切り抜ける

吉忠は創業128年目を迎えますが、いま振り返るとその経営は革新の繰り返しでした。当社が株式会社になったのが大正6年。もちろん、室町筋の会社としては初めてのことで。当時の呉服問屋は、主人、番頭、丁稚という封建的な制度が存在していましたが、2代目である社長は持ち株制度のようなものを設け、会社の利益を社員1人1人に還元するという仕組みをつくったのです。その数年後に、「室町では電信柱しか残らない」とまで言われた大正大恐慌が起きました。社員がいくつかに分割する「バス1台経営」です。守るだけの伝統が必要かどうか、社員が残ることができなくなりました。まさに、伝統の中に革新を見出すことで、「伝統」そのものを守ることができたのです。

2度目の危機は第二次世界大戦後に訪れました。当社は京都でも5本の指に入るといえる歴史を誇る老舗の呉服問屋でしたが、敗戦で時代は洋服にも洋装に切り替えることになりました。まさにこれは創業者が残した「時の流れに従え」という教訓を実践したものであったと思います。その後、日本人の洋服需要の急増がどんどん伸びていったのは周知のとおり。戦争という危機もまた、伝統の中の革新によって切り抜けることができたわけです。

革新によって 伝統は継承されていく

3度目の危機は昭和47年のオイルショックでした。そのときまではモノを作れば売れるという状態で、当社でも年間100人もの人材を採用していましたが、石油ショックで売上げがストップしてしまっただけでなく、人を出さなければ減らさず、在庫を3分の1にすることはできない。当時、専務だった私が導き出した答えが、会社をいくつかに分割する「バス1台経営」です。大きい会社にはベテラン社員を派遣し、「小さい会社には将来性のある社員を派遣する。本社は財務や人事、そして、信用を担う。子会社は本社の信用をもとに営業に専念する」という仕組みを構築することによって、わずか3～4年で目標とする適正在庫を実現することができました。

そして、いままたほとんどの中小企業がピンチの時を迎えています。当社では16社あった会社を5社にまで集約しながら、社員全員が大きなかたまりとなってこの危機に立ち向かっていこうと考えています。革新に次ぐ革新を繰り返すことで、伝統というのは継承されていくものです。守るだけの伝統ではやがて消え失せてしまうでしょう。新しい時代を表現してこそ、未来に素晴らしいと評価される伝統を残せるのだということを知っていただきたいと思います。



□

□

□